

50. 労災患者の職場復帰状況

山口労災病院リハビリテーション科¹

○幸田 英二 (OT)¹, 砥上 恵幸 (PT)¹, 八木 宏明 (PT)¹

古賀 隆一郎 (PT)¹, 富永 俊克 (MD)¹, 松島 年宏 (MD)¹

【はじめに】

我々は平成16年6月より、「復職調査票」と「復職カンファレンス」を利用した職場復帰支援に取り組んできた¹⁾。特に、平成20年に診療報酬が改定され「職業復帰訪問指導料」が算定可能となつてからは、H21年7月に職場復帰支援システム（職場訪問）を開発し、積極的に労災患者に対する職場復帰を支援してきた。今回、労災患者の職場復帰状況を調査したので若干の考察を踏まえて報告する。

【対象と方法】

平成21年4月1日～平成22年3月31日までの間に、労災保険適用でリハビリを行った患者は56名であった。その内、障害が重度で復職困難と思われる方や受傷して数年経過している方6名を除外した46名の労災患者を対象に、郵送によるアンケート調査を行った。調査内容は、職場復帰の有無や時期、職場復帰に際しての問題点（不安）、リハビリスタッフのアドバイスについてである。

【結果】

調査に対し、46名中27名（回収率58.7%、男性20名 女性7名）から回答を得た。障害の状況は、上肢障害12名、下肢障害13名、体幹障害2名であった。職場復帰状況は、20名（74%）が復帰しており、その中現職復帰が17名であった。職場復帰までの期間は、1か月以内が12名（上肢障害3名、下肢障害9名）、3か月以内が5名（上肢障害3名、下肢

障害2名）、6か月以内は2名（上肢障害）であった。職場復帰に際して不安を感じていたのは10名（上肢障害4名、下肢障害6名）で、内容は、元通りの仕事ができるか、重量物が持てるか、痛み・しびれなどであった。現職復帰した17名中9名が不安を感じていた。リハビリスタッフのアドバイスにより職場復帰に対する不安がなくなったと感じたのは20名中8名、少しくなつたが9名であった。職場復帰の際に役に立ったかについては、役に立ったが9名、少し役に立ったが7名であった。

【考察】

我々が以前行った調査では、勤労者の約3割が職場復帰に際して何らかの不安を持っていた。今回の調査でも、労災患者に限ったものであるが、半数が不安を感じていた。しかし、リハビリスタッフのアドバイスにより不安の軽減および職場復帰の際に役に立つと感じていることから医療機関において早期から職場復帰に対し取り組みをすることは意義深いと推察できた。また、今回の調査で下肢障害の患者は、比較的早く職場復帰をしている反面不安を感じているものが多く、そのため下肢障害の患者には急性期からの積極的なアドバイスが必要なかもしれない。その反面、上肢障害の患者は、職場復帰までに比較的長い期間を要しており、長期間のリハビリテーションが必要だと感じられた。当院は労災病院として勤労者の職場復帰支援を行う社会的使命を持っている^{2) 3)}。これからも様々

な工夫をし、職場復帰支援を主体とした勤労者のためのリハビリテーションプログラムを創造し実施していきたい。

【まとめ】

労災患者の職場復帰状況について郵送によるアンケート調査を実施した。その結果 46名中 27名から回答が得られた。患者の職場復帰への不安に対して、早期から職場復帰支援をしていくことは意義深いと推察される。今後、急性期医療機関の在院日数はますます短縮化していくと予想されるため、障害に応じた勤労者のためのリハビリテーションプログラムを創造していく必要がある。

【引用文献】

- 1) 砥上恵幸, 富永俊克, 城戸研二, 黒川陽子 : 急性期医療機関における職場復帰支援—「復職調査票」を利用した支援の試み—。日職災医誌,54 : 95-98,2006
- 2) 砥上恵幸, 富永俊克, 城戸研二, 黒川陽子 : 当院における職場復帰支援の試み～退院前職場訪問を実施した脳卒中麻痺患者の現職復帰支援～。日職災医誌,55 : 141-144,2007
- 3) 伊藤庄平, 半田一登 : 理事長・会長対談「勤労者医療を考える」, 勤労者医療の実際・リハビリテーション技術による健康増進と職場復帰支援:全国労災病院リハビリテーション技師会編。2007,pp1-7